

信 毎 俳 壇

坊城 俊樹 選

炎天や列なす貨車の地の震へ

(上田市) 松沢 昭一

ふくらみつ暮るる西日とガスタンク

(上田市) 竹内 重美

かな響ふ異国の窓にいわし雲

(松本市) 伊藤 和夫

一刷毛の雲から届く秋の声

(長野市) 松本 宏要

爽頼や乗馬の少女背筋美し

(箕輪町) 向山 政俊

遠雷の音の微かな夜の湯舟

(佐久市) 依田 俊

女将めて相槌ばかり居待月

(佐久市) 真山 邦弘

採血に腕まくりせる厄日かな

(松本市) 中村 百仙

更科の山河まぶしき今日の月

(小諸市) 佐藤ゆきな

残葉を終へて月夜を授かりぬ

(長野市) 宮沢 信博

佳作

お互ひをつちわであふき長話

(長野市) 北沢 京子

秋刀魚焼き泣きたい気持ち煙に巻く

(佐久市) 高橋衣里子

選評

一句目、何両も続く貨車の列。炎天の灼熱の中で大地を震わせながら永遠に続く如し。どこか大陸の風景にも思える壮大な句。二句目、この句も大きな景色を詠じた。膨らんで見えるのは真っ赤

な夕日とガスタンク。都市の壮大な灼熱のドラマである。三句目、仮名を習っているのは外国に住む子だろうか。いわし雲とは日本の秋の雲の呼称だが、あくまで異国の雲であることに郷愁がたたよう。

今井 聖 選

星月夜大と見送るバイク音

(大田市) 丸山めぐみ

蟬の骸フリキの塵取に

(松本市) 伊藤 和夫

野分去り夜気すつぽりと入れ替はる

(上田市) 中野 康子

五千歩の帰路は 駅冷房車

(長野市) 長田 光弘

立話続く畦道蟬雲

(佐久市) 佐藤 勝子

朝顔を数へエプロン締め直す

(長野市) 渡辺 恭子

赤とんぼ乗るか筋肉質の風

(長野市) 武田 芳子

一面に空気の染まる蕎麦の花

(長野市) 小山田満子

秋出水けふは畑の石拾ひ

(長野市) 田中 重美

新涼や嬰兒の肩よく動く

(原村) 加藤津恵子

佳作

新涼や仏足石に魚の判

(長野市) 白鳥 寛山

休暇果つ力をこめて肩を描く

(長野市) 宮沢 朝子

選評

一句目、訪れた人がバイクで去ってゆく。犬も「私」もその人との別れを惜しんでいる。美しい星空のもとで。二句目、昆虫の骸がちり取りの上ののっている。人にも虫にも死は等しく訪れる。日常的

な風景の中にも一回性の出会いを感じさせる。三句目、台風が来て去るたびに秋は深まる。やがて肌寒さが身に沁む季節が訪れる。四句目、歩くことを心がけている日々だが時折楽をしたくなる。

神野 紗希 選

頂に鯨の化石秋うらら

(長野市) 萩原 宏祐

零れ大豆を砂ごと集むガザの子等

(松本市) 小林 幸平

苦瓜の花の甘さや秋の蜂

(大田市) 丸山めぐみ

ペコちゃんのペロは右側夜の秋

(長野市) 小林 明男

相傘を蜜つたふべし蘭の秋

(小諸市) 加藤 陽介

秋めくや天津飯に銀の匙

(松本市) 伊藤 和夫

秋風やスタジオ隅のトウシューズ

(長野市) 赤駒道之助

ゴジラ現るような雲湧く九月かな

(長野市) せきたつお

飛ぶ星を二人数えた岳の夜

(松川村) 岡 豊村

かなかなや木造二階建駅舎

(原村) 加藤津恵子

佳作

ペン立ての場所定まりて夜長かな

(辰野町) 小沢 隆

風の道棚田を渡る赤とんぼ

(小海町) 井上 英一

選評

一句目、かつて海底だった地層も、隆起して山となった。だから頂にクジラの化石が眠る。信州大学の研究者らが秋田の山中でクジラの化石の発掘を進めている。うららかに澄む空に古代の海の記憶

がひらめく。二句目、飢えに苦しむガザの子に心を寄せた。配給で零れた大豆を砂混じりでも拾う切迫。三句目、蜂がその蜜を求める姿に、甘いゴーヤも花は甘いと気づいた。世界の新たな一面の発見。

